

# ヒグマ対策マニュアル

北海道の山域、隣接する農地や市街地はヒグマの生息地であり、多くの個体が人間の生活の影響を受けながらも身を潜めつつ暮らしています。ヒグマと接触し不幸にも事故につながってしまった場合ケガや死亡といった非常に深刻な被害につながる可能性があります。そのため、北海道では、ほぼ全域において間接/直接にかかわらずヒグマとの接触事故を避けるために細心の注意を払う必要があります。

## ヒグマの生態 ～北海道はヒグマの楽園～

### 1. 生息地

- a. 広義には利尻・礼文以外の北海道全域。（ヒグマのいない場所は北海道にはほぼ無い。）

### 2. 活動時間

- a. 昼夜を問わず活動。
- b. 1月～3月は冬眠。12月はまだ起きている個体も多く雪の上の足跡が多い。
- c. 5～6月あたりは繁殖シーズンであり、ヒグマの行動が注意散漫になっている事がある。

### 3. 特徴

- a. 知能が高く非常に賢い。犬と霊長類の間ほどの知能があり記憶力や学習能力に優れる。
- b. 警戒心が強く人間の行動パターンを学習するため、基本的に人間の少ない時間・場所に出没する傾向がある。逆の行動学習（人間は怖くない、避ける必要がない）、誘引の影響を受けた個体はこの傾向が逆になる。
- c. 嗅覚が優れている。犬の6倍程度の嗅覚があり、ほとんどの匂いを嗅ぎ分け、隠された餌でも見つけることができる。
- d. 聴覚もよく、大きな音、足跡などに敏感に反応する。
- e. オスヒグマの行動範囲は広く、繁殖行動を行うため遠方まで移動する。
- f. 足跡の特徴は前足が横長で短め、後ろ足は縦長で、前後が近づいて残されている場合がある。保存状態の良い物は指根球という丸い肉球が見られる場合がある。成獣は前足の幅が14センチ以上、未満はメスか若いオスである。
- g. 木登り、泳ぎは得意。まだ親離れしていないほど若い小さい個体は木に登り退避行動を取ることがよくある。

### 4. ヒグマが近寄りやすい場所

- a. 餌場、セリ科草本やアキタブキ、コクワ、ヤマブドウ、コケモモ、クロマメノキ、ミズナラ（どんぐり）、ミズバショウなど餌となる植物の群生地。
- b. 牧場・農地付近（とうもろこし・デントコーン）
- c. シカ、鮭、アリの多い場所、動物の死骸などの付近
- d. 人間の生活圏において誘引の可能性が考えられる全ての場所。（登山道、ゴミ、釣り、食品加工、漁業、産業廃棄物、観光客の餌やり）

### 5. 各山域のヒグマ注意レベル

- a. レベルA：羅臼岳、知床硫黄山、知床連山、幌尻岳、大雪山全域、暑寒別岳、大千軒岳、狩場山、天塩岳、夕張岳、石狩岳、ニペソツ山、ニセイカウシュッペ山、ウペペサンケ山、札幌近辺の山、
- b. レベルB：雌阿寒岳、雄阿寒岳、斜里岳、十勝岳、西別岳～摩周岳
- c. レベルC：羊蹄山

d. ヒグマは居ない：利尻・礼文

## ヒグマ事故とはどんなものか？ ～重大な被害～

1. ヒグマ事故の因子
  - a. ヒグマとの鉢合わせ/急接近
  - b. 親子グマとの遭遇。子熊を守る行動を誘発
  - c. 驚かせる行為
  - d. 餌採取の邪魔をする行為、餌を横取りする行為（（と、とられてしまった）
  - e. テリトリー侵害、巣穴に入ってしまった
  - f. 敵対行動（と、とられてしまった）に対する反撃
  - g. 上記の行為をトリガーとする排除行動
2. ヒグマによる事故の被害
  - a. 咬傷
  - b. 搔破・擦過傷
  - c. 失血
  - d. 感染症
  - e. 骨折
  - f. 身体損壊
  - g. 内臓損傷
  - h. ショック
  - i. 死亡、行方不明（土饅頭にされる）

ヒグマ事故によって怪我を負った場合、程度に問わず感染症リスクが高いため、全てのケースにおいて即時緊急通報・即時退避である。

## ヒグマ事故を避けるには ～先に気づかせる。誘引・人馴れは御法度～

1. 最重要なのは、そもそもヒグマと遭遇しない事  
そのためには、いち早くヒグマの回避行動を促す。つまり**人間側の存在を事前的にヒグマに知らせる事が必要である**。具体的にはクマ鈴を鳴らしたり、声かけを行うなどが適切と考えられる。ただし、クマ鈴は行動中ずっとなってしまうため、ヒグマが発する微細な物音に気づくのを遅らせてしまい注意が必要である。基本的にはガイドや自然管理官などはクマ鈴を使うことはない。そして何より、人間の物音に対し、恐れない・近づいてくるヒグマも居るということを意識しなくてはならない。ラジオは経験的にあまり役に立った事がない。またクマ鈴と同じように気づき遅れのリスクがある。
2. ヒグマの痕跡に気を払う  
人間がヒグマの存在をいち早く察知することもまた重要である。足跡、食痕、植物の不自然な倒れ方、樹木の剥皮痕、不自然な転石、糞、熊棚など、ヒグマがその場所にいる/いた場合の痕跡に常に気を払い遭遇を避ける。
3. 環境要因に気を払う  
沢・海沿い、強風、濃霧、大雨等の環境下においては、音が聞こえづらい、視界が悪いなどの要因によってヒグマと人間が遭遇しやすくなる可能性がある。また、両脇が千島笹に囲まれて

いたり、函地形であったりといった狭い一本道では遭遇した場合の回避ルートがヒグマにも人間にも確保しにくいいため注意が必要である。また人間が少ない場所・時間などについては明らかにヒグマとの遭遇リスクが上がる。追い風は人間の匂いをヒグマが気付きやすくなり、クマスプレーを効果的に使用しやすくなる。

#### 4. 誘引は絶対に行ってはならない！

ヒグマが人間に近づく・回避しない行動を取る場合、その個体は人間による誘引の影響を受けている可能性がある。誘引を受けたヒグマは、人間の餌・ゴミなどを食べて人間の食べ物に執着するようになる。そのため人に近づき、最悪の場合は人を襲う。カムエクでの福岡大学ワンゲル部の事故はヒグマ誘引とザックの取り返しによる餌の横取り行為（と、とられてしまった）が重なり起こっている。朱鞠内湖の人身事故も事故当事者ではない釣り人の食料が取られたことなどによる間接誘因がヒグマの付き纏いのトリガーとなっている可能性が高いと考えられる。**ザックデポ、ゴミ投棄、トイレの不始末、テントへの食べ物持ち込みなどは、間接・直接的誘引行為であり、結果的には自身の命の危険のみならず、他者への殺人幫助ともなる可能性があるため絶対に慎まなければならない。**登山者がザックのサイドポケットからペットボトル・行動食などの誘引物を無意識的に落としている事例は多くあり重大な禁忌行為である。

#### 5. 人馴れをさせない

ヒグマが人間に近づく・回避しない行動を取る場合、もう一つ考えられる要因は、その個体が人間に馴れ恐れなくなっている可能性が考えられる。具体的には、写真を撮るために近づいたり、極端な接近などは、人馴れを誘発するため慎まなければならない。

#### 6. 行動学習による遭遇リスクの上昇

ヒグマの学習能力は高いため、人に馴れると人の存在を気にしなくなり、テントや避難小屋に近づくなど行動が大胆になったり、人間の食べ物・飲み物の味を覚えると付き纏い行動に繋がってしまうなど、事故の可能性が大幅に上昇してしまう。しかもこれらの事象は併発し事態が重大化しやすい。

### ヒグマとの距離 ～走って逃げてはいけない。距離は100メートル以上は離れたい～

1. 距離を問わず、**ヒグマと遭遇した場合に最もやってはならないのは、驚いて声を上げる、走って逃げるなど急な行動である。**ヒグマも驚いて本能的に追いかけてきたり、敵対行動ととられ臨戦体勢に入ってしまう。
  - a. 100メートル以上の距離があり、ヒグマがこちらの存在を気にしていない場合は、まだセーフ。落ち着いて物音を立てずに回避する。
  - b. 100メートル以上の距離があり、ヒグマがこちらの存在に気づいている場合は、一応セーフだが要注意。こちらの存在を気づかせるため静かに声をかける、物音を立てて注視しつつ焦らず落ち着いてゆっくり後方に回避する。
  - c. 50メートル程度の中距離での遭遇。この距離となるとヒグマがこちらの存在に気づいていないことは考えにくい。黄色信号。なんらかの要因で知らずに接近してしまったことが考えられる。可能ならばヒグマと人間の間に遮蔽物を挟みつつ、クマスプレー発射準備。ゆっくり焦らず声をかけ手を降るなどしながら落ち着いて後方に回避。
  - d. 50メートル以下。赤信号。命の危険がある。即座にクマスプレー発射準備。ゆっくり焦らず遮蔽物を挟みつつ落ち着いて後方に回避。近づいてくる場合は、声を上げ手を振りながら回避を促す。

- e. 20メートル以下に迫ってしまった場合。ほぼ確実に威嚇される。ただしまだブラフチャージである事が多い。怯まず声を上げ手を振りながら遮蔽物を挟みつつ落ち着いて回避を促す。さらに近づいてくる場合は風上よりクマスプレーをヒグマの顔に発射。
- f. 10メートル以下で迫ってくる場合。クマスプレーをヒグマの顔に発射。それでも迫ってくる場合、声を上げ最後まで怯まずストックなどで応戦する。転ばされた場合は、ザック背面で頭や首を守りつつ丸まって防御体勢になりやり過ごす。
- g. 位置関係はヒグマの居る場所が高位置であるほどリスクが高い。

## 総括 ～お客様へのお願い～

2025年8月15日に羅臼岳においてヒグマによる痛ましい死亡事故が発生してしまいました。この事故を鑑みまして、改めてヒグマによる事故の再発・未然防止策として、以下のように活動中の注意点・禁止行為についてお知らせをいたします。

- ・ ガイドの先を歩かない。横並びで歩かない。声が届かない/姿が見えないような距離間隔では歩かない。その都度指示に従う。
- ・ ザックデポはしない。
- ・ テントに食料を持ち込まない。
- ・ ザックのサイドポケットにスポーツ飲料等のボトルを入れない。
- ・ 甘い匂いの「ボディクリーム、コロン、日焼け止め」などを使用しない。
- ・ 食べ物、残りカス、包装紙などのゴミ等を野外で落とさない。
- ・ ヒグマとの遭遇時、走って逃げない。大声を出したり慌てた行動はしない。
- ・ ヒグマに対しみだりに接近したり、記念写真・動画を撮ったりといった人馴れを促すような行動はしない。
- ・ まだ暗い早朝、日暮以降の時間の行動はしない。（ワンデイ山行はリスクが高い）
- ・ ガイドが一人の場合、途中でパーティが別行動になる事は出来ません。

人身事故を引き起こすヒグマ個体の多くは、人間のゴミに餌付いたものである。つまり多くの場合、ヒグマの事故は**人為的に引き起こされている**のです。